

いたちかわらばん

通刊26号 鮪川・狹川 / 川原番・瓦版 **04 夏号**

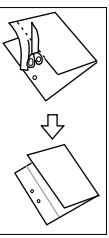


【版画 宗森英夫】

【昔の新橋付近】

切り取り線

この部分を切り取ってファイルすると便利です。



私の幼い頃の思い出にいたち川はなくてはならない存在です。現在は新橋のたもとにある道しるべとお地蔵様は、昭和二十年代は道路の反対側にありました。周りを水田に囲まれ、地蔵様と道しるべだけが立っていたのです。ただし、地蔵様が立っていたのは畑の端でした。どうしてここだけが畑だったのか、それは関東大震災までそこに家が建っていたからです。屋号は「新橋」でした。私の父が幼少時代を過ごした名残が畑としてその跡をとどめていたのです。当時「新橋」の欄干には、「にひはし」と書かれていました。大正時代に架け替えた時は、当時としては珍しいコンクリート製だったからではないでしょうか。そう言えば下流に架かっていた田立橋、上流の海里橋、飯島から柏尾川を渡って亀の子山に行く橋もみな木製の橋でした。

この頃、笠間十字路から新橋を渡ると、道しるべと地蔵様はバス道路より小菅ヶ谷の谷戸に向かって十メートル程行った所に立っていました。当時子供心に道しるべは分かれ道に立っていなければ道標にならないの、と思っていました。話を聞くと、道しるべの脇に細長い三角の田んぼが大正期までの戸塚に向かう道路だったそうです。新橋を架け替えた時、古い橋よりも川下に十メートル程ずらして架けたため、道も新しく造ってしまったからなのです。

さて、その向こうには、左手に蛇塚山が見え、その下に木造二階建ての海軍の集会所がありました。現在の小菅ヶ谷町バス停付近、右手には同じような建物が並んでいましたが、海軍の将校宿舎だったそうです。このような歴史の流れも新橋のたもとに立つお地蔵様と道しるべは数百年の間じつと見つめ続けていたのかと思うと、感無量です。

ところで現在すぐ脇に植えられている吉野桜は、私が昭和二十六年に砂押川の川べりに植えられている吉野桜の実を植えて育てたものです。だいぶ短く切り取られかわいそうな気もしますが、管理する立場で考えたらしいかたありません。しかし、これからはずつと見守ってほしいと願うばかりです。

にひはし(新橋)

(元中村小学校長 岩田公夫)

『いたちかわらばん』アンケートについて

25号(04春号)で行いました『いたちかわらばん』のアンケートの結果をご報告致します。

愛読者の年齢(年代): 多い順上位3位

- 1 60代
- 2 70代
- 3 50代

興味をひかれた記事の内容(上位5位)

- 1 川・水源
- 2 川辺の植物
- 3 鳥類、水辺愛護会の活動報告
- 5 昔の話、魚類

どのような内容の記事を読みたいと思いますか(上位5位)

- 1 鳥類
- 2 昔の話
- 3 川・水源、植物類
- 5 水辺愛護会の活動報告

●その他のご意見

『いたちかわらばん』に対する、お褒めのことば、掲載内容にたいする要望、川の管理に対する要望等いろいろ多数のご意見をいただきましたが、紙面の関係上掲載は省略させていただきます。本誌に関する意見については、今後の編集・企画に役立てます。また、施設・管理につきましてのご意見は区役所・土木事務所に市民の要望としてお伝え致します。

●アンケートの考察

アンケートを書いていた方は、『いたちかわらばん』を楽しみに読んでいる人が多く、いたち川をこよなく愛していることが分かりました。記事の内容では、魚・鳥類や周辺に生えている植物のことに興味をもっている人が多く、いたち川の自然環境をこれからも大切にしていかなければならないと感じました。また、60代の方の読者が一番多く、昔の話についても関心が高いことが分かりました。「はじめて読んだ」という方には、これを機会に興味をもって読んでいただければ幸いです。

これからも皆さまの期待に応えられるように充実した『いたちかわらばん』にしていきたいと思えます。アンケートにご協力いただきありがとうございます。

いたち川 OTASUKE 隊

『いたちかわらばん』は右に示しました場所に用意しています。当所がない場合は区役所に用意してあります。 →

いたち川にもコイヘルペスが侵入

「コイヘルペス(KHV)とは?」

コイを襲っているKHV(Koi Herpes Virus)が全国の池・小沼・河川に蔓延しようとしています。

我が街の「いたち川」のコイも今年の5月中旬から感染が確認され、7月下旬までに約700匹が斃死しました。横浜市内の河川では鶴見川水系、境川水系のコイから陽性反応が出ています。

いたち川における感染状況は、下流から上流に向かって感染しており、現在では青葉橋寄りまで感染が確認されています。コイ間の感染以外に感染死したコイをカラスがついばみ上流へ運ぶことも考えられることから川を管理する土木事務所は頭を痛めています。

コイヘルペスは1997年に初確認され、1998年にイスラエル、米国で発生し、現在までにドイツ、オランダ、ベルギー、英国、南アフリカ、インドネシア、台湾で発生しています。

コイ特有のウイルス性の感染症で他の魚や生物には感染することはありません、このウイルスは水温13℃~27℃の範囲で活発に活動し、コイに感染すると100%斃死すると言われています。人の体温は一般的に36℃以上で、哺乳類や鳥の体温も38~40℃ありますから、感染はしない訳です。しかし、もし死んだコイを触ったり川に入って遊んだ後は、消毒液(消毒用アルコール、塩素系消毒液など)か40℃以上の温水で、手足や川の中に入れた用具等も良く洗いましょう。

川などにコイが死んでいるのを発見したときには、土木事務所に連絡してください。

(コイヘルペス病マニュアル:全日本錦鯉振興会発行による)

水・人・子(ミジンコ)

『いたちかわらばん』が配布用として置かれている場所
 栄区役所区政推進課、区内各地区センター・地域ケアプラザ・コミュニティハウス、本郷台駅、港南台駅行政サービスコーナー、栄公会堂、栄図書館、リリス、あーすぶらざ、栄プール、翠風荘、荒井沢市民の森、上郷 森の家

また、本郷台駅駐輪場掲示板及び矢沢堀小川アメニティ掲示板に掲示していますので、こちらをご覧ください。

発行: 狹川 OTASUKE 隊 (いたちがわおたすけたい)
 OTASUKE 隊事務局: 栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
 TEL 045-894-8331 FAX 045-895-2260
 栄土木事務所下水道係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
 TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
 (お便り・お問い合わせは こちらまで)

発行年月 2004年7月
 通刊26号

きらめく 未来への川



あこのころ私は、自然や環境に全く興味がなくて、水も電気もじゃんじゃん使っていました。今思い返すと、恐ろしいことを私はしたものです。その後、考えは一転し・・・。

笠間小に通っていた私が自然・環境に興味をもつようになったのは、4年のときに調べた自由研究からです。いたち川の橋の名前、特徴を調べ、模造紙にまとめるため、毎日写真を撮って父・妹と歩きました。調べてみるといろいろ生き物、植物が生えていて、「面白いな」と思いました。そしていたち川が好きになり、自然・環境に興味が生まれました。

その後、先生が総合学習の時間を使って、いたち川について調べることにしました。私たちの学校は下流の方にあつたので、下流のほうのいたち川を見つめて、学習することになりました。私は、いたち川が大好きになった頃なので、その授業を受けるのが何よりの楽しみになりました。どんな植物、動物がいるかから始まり、5年生になるといたち川の水の性質も調べました。さらに、クラスでグループに分かれてどんなゴミで人がいたち川を汚しているか、いたち川の生き物の観察、どんな環境にいたち川はおかれているのか、などを調べました。そのような活動の基に作られたのが、『笠間が見る川いたち川』です。先生の指導のもと、皆自分の仕事をもち、グループやクラスのチームワークを発揮し、写真をとったりインタビューをしたり、と、クラス全体で苦労しました。私たちの本は大成功し、いたち川も人気になったのです。

いたち川での発見は、とても珍しい、輝かしいものでした。陸を泳ぐように動く青大将、大きな亀（その後、山田君と名づけられて飼われれました）が日なたぼっこしている姿、大きな鷺が雄大に空を翔る姿…。私たちはいたち川の魅力にさらに引き付けられたのでした。特に、飼っていた亀3匹はクラスほとんどの人の人気者になり、3匹がえさを食べる姿や歩くしぐさは、愛らしいものでした。他には、一時期飼っていた青大将。登校すると真っ先に蛇の水槽に駆け寄り人が多く見られました。2度も脱走をしたときは、皆蛇を探しました。見つかったときはほっとして、また脱走しないかどうか授業中にも水槽をじーっと

見つめる人もいました。生き物に囲まれた5年生でのいたち川との楽しい授業も、6年生になってももちろん続けます。

6年生になるとボランティアとして、いたち川の掃除をするようになりました。これにいたっては、多くの方のご協力を得ました。天気や学級の都合でいたち川にいけない日があつたけれど、1度の掃除で大量のごみが出てきました。学年で汗を流し、いたち川をきれいにしよう！というみんなの思いが1つになりました。空き缶、吸殻、ビニール袋などが多く見られ、川に降りてゴミと同時に生き物も見つたり、貴重な体験が出来ました。

私たちは今まで、いたち川を調べ、いたち川を大好きになり、いたち川のためになろうと、学習だけではなく、自分たちの日常でも思ってきました。こうして私たちは、中学生になってバラバラになつても、いたち川を忘れてはくはずがありません。

こうして活動してきたことも、絶対に無駄にはなっていないはずです。「私たちはこれから何をすればいいのか」「いたち川のために自分が出来ることとは何か？」そう聞かれてしっかりとした答えを出せるのは、きっと小学校生活4,5,6年のあの頃があつたからでしょう。今では、いたち川の自然、身近な自然だけではなく、県の環境、地方の環境、日本の環境、世界の環境についても考えることが出来ます。いたち川は、私たちそれぞれの未来への出発の川でした。

(笠間小学校平成15年度卒業生 比留川知華)



6年生の時の川掃除。アシに絡んだゴミを取る



深い所の川底のゴミを箱メガネで探す男子生徒

川縁(かわべり)は涼しいよ!



いたち川には散策スポットがたくさんあります。下流側から「いたち川プロムナード」、「扇橋の水辺広場」や「稻荷森の水辺」といったふるさとの川整備事業区間、そして上流側には「長倉町小川アメニティ」、「瀬上池」と「瀬上市民の森」、「円海山近郊緑地特別保全地区」など、いたち川沿いの散策スポットは、これからの夏休みには多くの子どもたちの遊び場となります。

これらのスポットには何か良いところがあるのでしょうか？ 共通点といえば、いたち川の水の流れに沿った場所であるということ、子どもたちにとっては、生きものが多く棲息する遊びの場であることは容易に想像が出来ます。

生きものは極端な環境の変化が大の苦手です。地球温暖化や都市のヒートアイランド現象などにより、横浜の夏は年々厳しさを増して来ています。見方を変えれば、生きものも、子どもたちも、厳しい夏に心地よい場所を求めさまよっているのかも知れません。

一方で、人が「心地よい」「涼しい」と感じるには、次の3つの要素があります。

- ・風…風速1mにつき、体感温度が1℃下がると言われます。川縁は風の通り道です。
- ・陰…夏の厳しい直射日光を遮ります。日射病を防ぐには、帽子をかぶり川縁の木陰や東屋で休憩を。
- ・水…蒸発(気化)熱により気温が下がります。川を流れる水は、都会を潤す貴重な水なのです。

川縁は、そんな3つの要素を見事に満たしているのです。つまり、「生きものが多い場所」=「心地よい場所」=「涼しい場所」=「川縁」と言えるでしょう。

みなさんも、この夏、涼しい「いたち川」へ出かけてみませんか！
(とりずき)

縁の下の力持ち (その1)

「いたち川」をこよなく愛し続けて四〇年。その師は笠間にお住まいの林茂夫さんである。定年退職後、お子さんからプレゼントされたカメラを携え、いたち川に住む鳥や魚の写真を撮り続けた。なかでもカワセミを撮った写真は特に多い。カワセミを被写体にながぶり四つになつて撮った写真もあれば、軽いタツチのスナップ写真もある。生き物だけでなく、いたち川周辺の植物の写真も沢山ある。先日、その集大成と言つべく、貴重な写真集を見せて頂いた。どの作品も、素朴で飾らないお人柄がそのまま投影されていて、見ていると心休まる写真ばかりである。以前はいたち川の清掃にも参加して頂いたけれど、七六才になられた今は、ご自身の趣味の世界の中で悠々自適の生活をされている。

昨年、NHKがホットモーニングという番組でいたち川取材に訪れた折には、師と奥様が案内役を務めたので、ご存じの方も多と思う。その優しくて誠実な語り口は、視聴者の反響を呼んで好評だったと聞いている。

元々の趣味が、川原から拾ってくる何の変哲もない石ころを磨いて、いろいろな物を連想することだということもロマンがあつて如何にも林さんらしい。そんな石ころ(失礼!)が庭に作つた棚の上に何百と鎮座ましましている。趣味は他にも時事川柳や俳句等があつて、川柳においては全国紙に千首以上掲載された実にも多才なお人である。ちなみに、川縁のフェンスに掛けてある美化推進用の看板の写真はどれも師の作品である。これからも、いたち川を温かく見守って下さいね。(マンボウ)

いたち川で見られる植物 ⑤

稚魚や野鳥の隠れ場を提供するアシ



池・沼・河川などの水辺の植物として代表的なものとしてアシがあります。日本全土に分布していて、昔は多くの河川の下流域に大きなアシ原がありました。現在では、河川改修で、その多くが失われてしまいました。大形の多年草で、高さが二メートルになり、取つて、編んで、夏の日除けに使うヨシズに利用されます。今では、限られた所でしか作られていません。アシ(葦)は、「悪」「通じる」というので「シ(良)」といわれることが多いようです。

いたち川では、稻荷森の水辺より下流のあちこちで見られます。八十月に円錐状の花序(長さ一五〜四〇センチ)を付けます。抽水植物(水底の土に根をはり、茎や葉を水面より上にのぼす植物)の代表的なもので、根の周りは魚の産卵場所になると同時に孵化した稚魚たちが餌とするプランクトンが豊富な餌場であり、外敵から身を守る隠れ場にもなります。また、川原では野鳥の営巣地にもなり、雛たちの隠れ場にもなります。水の浄化にも役立つといわれ、最近その効用が見直されてきてお

(いもり)